

## 国内経済情勢

### 概 観

中小企業の設備投資は引続き低調であり、住宅投資もならしてみると依然伸び悩みの域を脱していない。他方、大企業の設備投資は堅調を持続し、輸出も幾分増勢を鈍化しつつも根強い増加を続けている。また公共事業請負額も引続き高水準で推移している。この間、個人消費は大勢として幾分持直し傾向にあるものの一部に天候不順の影響がみられた。こうした中で素材関連メーカーの在庫調整は生産抑制態勢の下で、業種により跛行性を伴いつつ、引続き進捗をみている。

6月の商品市況をみると、石油製品、建材品等が軟化するなど回復歩調の一眼感が続いている中で、全体としては底堅い地合いを保っている。この間、卸売物価は為替円安の影響に加え、電力・一般産業向けC重油の値上げもあって小幅上昇となった。一方消費者物価(東京)は、季節商品や被服の値下りを主因に下落し、前年比上昇率も前月を下回った。

金融面をみると、5月のマネーサプライは前月に比し前年比伸び率をやや低めたが、基調としては安定した動きを示している。また、5月の全国銀行貸出約定平均金利は引続き低下した。

5月の国際収支をみると、輸出の増勢鈍化にもかかわらず輸入の低水準持続から経常収支(貿易収支季節調整後)は前月に続き黒字を示した。も

っとも資本収支が対日証券投資の伸び悩み等から流出超となったため、総合収支は赤字を記録した。この間、6月の為替相場は、世界的な米ドル堅調地合いの中にあって一高一低のうちに大勢として幾分円安気味に推移した。

#### 5月の生産、出荷は減少

5月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷(速報)は前月増加(各+0.3%、+2.1%)のあと、それぞれ-1.6%、-3.0%と減少した。

\* 以下増減率は特に断わらない限り、前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

財別の特徴をみると、当月は一般資本財(化学機械、産業用電気機械、電子計算機等)を除き、各財の生産、出荷ともいづれも減少した。なかでも資本財輸送機械(小型自動車、トラック等)や耐久消費財(軽、小型自動車等)は、5月実施の物品税引上げ前の駆け込み需要の反動や輸出減から大幅減少となった。また、生産財(鋼板、石油製品、合繊原料)や建設財(アルミサッシ、銅電線)も前月増加の反動もあって落込みを示した。

一方、生産者製品在庫(速報)は前月減少(-0.3%)のあと横ばいとなったが、素材関連では非鉄金属(アルミ、電気銅)、石油製品(揮発油、軽油、A重油)などが増加をみたものの、総じてみれば、メーカーの生産抑制等を支えに調整が続いている。

国内最終需要の動向をみると、まず設備投資関係では、5月の機械受注額(船舶・電力を除く民

需)は鉄鋼等製造業からの受注反動減を主因に8.1%の減少となった。一方、5月の建設工事受注額(民間分、速報)は+10.0%と3ヵ月連続の増加を示した(前月+5.9%)。

財政支出面では、6月の公共事業請負額(前年比)は+16.8%と引続き高い伸びを示し、4~6月通計では+21.0%と大幅な増加となった(1~3月+4.9%)。

消費面では、5月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は、食料品やスポーツ用品等の雑貨をはじめ衣料品、身の回り品等が順調な売行きを示したことから+8.4%(前月+7.6%)と引続き伸びを高めた。もっとも6月に入ってから都内百貨店売上高は天候不順の影響からやや伸び悩んだ模様である。6月の耐久消費財の売行きをみると、乗用車新車登録台数(除く軽、前年比、速報)は物品税引上げ前の駆け込み需要の反動が尾を引き前月(-16.6%)に続き-6.7%と落込んだ。もっとも4~6月通計では、-2.2%と前期(-5.0%)に比し幾分持直している。一方、家電製品はVTR等一部商品を除けば総じて伸び悩み気味であり、とりわけ夏物商品のエアコン、扇風機は天候不順もあって低調裡に推移した。

住宅投資面では、5月の新設住宅着工戸数(前年比、速報)は、1~2月募集の公庫融資分の着工増もあって+12.1%と55年1月以来16ヵ月ぶりに前年比プラスとなったが、ならしてみると、依然伸び悩みの域を脱していない。

雇用情勢をみると、5月の有効求人倍率は0.65倍(前月0.66倍)とわずかながら低下し、完全失業率も2.39%と前月(2.32%)比上昇した。この間、常用雇用は+0.1%とほぼ横ばいに推移している。

## 消費者物価は着実に低下

最近の商品市況をみると、前月に引続き回復歩調の服感が見られる中で、生産抑制による在庫調整の進展などを背景に、全体としては底固い地合いを保っている。品目別にみると、石油製品(灯油、C重油)や建材品(生コン、合板)が軟化した反面、条鋼類、塩ビ樹脂、亜鉛はメーカーの生産抑制維持のほか、輸出増や学校・病院建設等官公需の増加もあって上昇し、また合織(ポリエステル糸)、そ毛糸も強含みに推移した。この間、冷延薄板は天候不順による夏物家電の不振等を映じて上昇一服商状となっている。

6月の卸売物価をみると、為替円安の影響に加え、電力・一般産業用C重油の値上げもあって+0.4%と小幅上昇となった。

6月の消費者物価(東京、速報)は、一部公共料金の値上げがあったものの、野菜等季節商品の値下りや被服の反落を主因に-0.5%と下落した。なお前年比上昇率では+4.3%と前月(+5.0%)を下回り、季節商品を除くベースでは+3.8%(前月+4.3%)と着実な低下を示している。

## 貸出金利は引続き低下

6月の金融市場をみると、銀行券は9,503億円の発行超(前年同10,032億円)となり、月中の平均発行残高(前年比)は+2.9%と前月(+2.8%)をわずかながら上回った。一方、財政資金は国債発行額の大幅圧縮の反面、法人税を中心に税揚げがかさんだことから前年並みの揚超となり、この結果、月中の資金不足額は12,747億円(前年同14,980億円)となったが、日本銀行は主として売出手形の期日落ちと前月売却した政府短期証券の償還によりこれを調整した。

この間、コールレート(無条件物)は、上記のよ

うな資金不足地合いを映じて強含みに推移し、月中では0.3125%上昇、7.25%で越月した。また手形売買レート(2ヵ月物)も月中0.0625%の上昇を示した(月末7.5%)。

マネーサプライ(M<sub>2</sub>+CD平残、前年比)は、4月に預金金利引下げ前の一時的な借入見合いの定期預金増もあって前年比伸び率を高めたあと、5月にはやや低い伸びとなった(4月+7.9%、5月+7.5%)が基調としては安定した動きを示している。一方、5月の全国銀行貸出約定平均金利は短期金利を中心に-0.107%と前月(-0.119%)並みの低下を示した。

6月の公社債市況は、米国金利の堅調などに加え、国債等の発行条件改定問題が市場の模様ながめ気分を強め、弱地合いに推移した。この間、6月の長期国債の発行条件は、既発債市場利回りと新発債応募者利回りとの乖離を背景に改定された(応募者利回り0.091%引上げ)。一方、株式市況は、月初、前月来の調整場面を続けたが、委託保証金率の引下げや外人買いの再燃などから中旬以降上昇に転じ、既往ピーク水準で越月した(東証指数月末586.15、月中+25.91)。

#### 経常収支は2ヵ月連続の黒字

5月の輸出(通関、ドルベース)は前月大幅増加(+6.4%)のあと-2.4%と減少し、数量ベースでも0.9%の落込みとなった。品目別(ドルベース)には、船舶、鉄鋼、テープレコーダーが増加したものの、自動車が欧米向け自粛の影響もあって落

込んだほか、化学製品、合繊糸等も前月増加の反動などから減少した。

一方、輸入(通関、ドルベース)は-2.3%と前月(-1.2%)に続き減少したが、数量ベースでは原油の入着集中から2.3%の増加となった(前月-4.2%)。品目別にみると、原油がイラン原油の入着増もあってかなり増加したものの、砂糖、小麦等の食料品が大幅に落込み、また繊維原料等の原料品や機械(航空機等)も前月に続き減少した。

なお、6月の輸出入(通関、ドルベース)は各-2.5%、-4.4%となった。

5月の国際収支は、上記輸出入動向を映じて貿易収支(季節調整後)が1,444百万ドルの黒字(前月同1,870百万ドル)となり、経常収支(貿易収支季節調整後)も311百万ドルと前月に引続き黒字を記録した(前月同827百万ドル)。もっとも長期資本収支は対外証券投資が前月に続き高水準の流出を続けたことに加え、対内証券投資も小幅流入にとどまったことからネットでは724百万ドルの流出超となり、総合収支では1,172百万ドルの赤字となった(前月同2,443百万ドル)。

6月のインターバンク米ドル直物相場は、月央やや円高になる場面もみられたが、米ドル相場の主要諸通貨に対する堅調な地合いを背景に月末にかけて再び円安に転じ、225円75銭で越月した(月中2円25銭の円安)。

(昭和56年7月14日)